



Title	学校心理臨床の喫緊の課題に対する言語連想テストを用いたアプローチ：中学生を対象にした実証的研究と事例研究
Author(s)	赤川, 力
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61433
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 (赤 川 力)

論文題名

学校心理臨床の喫緊の課題に対する言語連想テストを用いたアプローチ
—中学生を対象にした実証的研究と事例研究—

論文内容の要旨

本研究は、学校心理臨床における喫緊の課題である、中学生の対人トラブルやいじめ、不登校・不登校傾向、発達障害に対し、言語連想テストを用いて早期に対応の指針を見出し、心理療法において自己の成長を促すアプローチを検討したものである。

近年、学校心理臨床においては、少子化や都市化、SNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）などの普及により、複雑な環境がもたらされている。その中で一般中学生には、友人関係のトラブルに加えいじめなどの早急な対応を要する事案が生じている。不登校・不登校傾向の中学生には、外部の医療機関や相談機関に委ねるなどの様々な事情で、学校臨床現場で出来る対応が遅れる事態が生じている。発達障害の中学生では、小学校から中学校に至る環境変化の中で対人トラブルや二次障害が生じている。そこで、これらの喫緊の課題に対して、本研究では、学校心理臨床において言語連想テストの反応特徴から、それらの問題を抱える中学生への理解とそれに伴う対応をいち早く見出し、心理療法に活かすアプローチを検討した。

研究全体は、実証的研究（研究Ⅰ～Ⅳ）と事例研究（研究Ⅴ～Ⅶ）から成る。実証的研究の研究Ⅰでは、言語連想テストを中学生に施行するにあたり、中学生の反応語の基準表、コンプレックス指標の基準値を作成した。研究Ⅱでは、中学3年間における言語連想テストを用いた縦断的研究を行い、発達における心理的特徴を検討した。研究Ⅲでは、別室や教室に通う不登校・不登校傾向にある身体反応を訴える中学生、身体反応を訴えない中学生の特徴について、言語連想テストを用いた理解を深め、対応に活かすことを検討した。さらに、研究Ⅳでは発達障害の中学生における言語連想テストの特徴から、理解と対応について検討した。

事例研究の研究Ⅴでは、言語連想テストを通して自身の成長を確かめた女子Aの事例から、面接経過と共に自己の成長を確認できる言語連想テストの臨床的意義について検討した。研究Ⅵでは、母親の病気がきっかけで来談し退室渋りを続けた男子Bの事例から、面接経過と共に心的外傷体験の語りへと繋がった言語連想テストの臨床的意義について検討した。研究Ⅶでは言語連想テストを施行すべきでなかった女子Cの事例から、面接経過と共に言語連想テストの施行を禁忌と判断すべきクライアントの特徴について検討した。

実証的研究と事例研究から、言語連想テストを実施することで、思春期特有の不安反応、不登校・不登校傾向における身体化に親和的な反応や対人不安が高い反応、発達障害における特有の反応などが見出された。これらの反応から、学校臨床における喫緊の課題に対して言語連想テストを用いた理解とそれに伴う対応の指針が、早い段階で得られることが見出された。そして、言語連想テストは反応語を面接過程に活かせるのみならず、自分の問題に気付く手助けをしてくれる有益なアプローチであることが見出された。加えて、言語連想テストから得られた反応語は、面接過程において豊富な話題になるだけでなく、非言語的な手段である絵画療法と併せて解釈することで、より深い理解に至ることが見出された。

これらの研究成果から、学校心理臨床の喫緊の課題に対して言語連想テストを用いたアプローチは有効であることが示唆された。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (赤 川 力)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	老松 克博
	副 査	教授	井村 修
	副 査	教授	日野林俊彦

論文審査の結果の要旨

学校心理臨床では、近年、中学生におけるいじめ被害、対人トラブル、不登校、発達障害などの問題が深刻になっている。本論文は、アプローチが困難とされるこれら諸問題に言語連想テスト（以下、WAT）を通して関わることで、心理査定ツールとしてはもちろん、心理的成長と変容を促進する治療技法としてもきわめて効果的であることを、実証研究および事例研究によって明らかにした労作である。

本論文は3部、6章で構成されている。第1部は先行研究のレビュー、第2部は調査と研究、第3部は考察である。第1部「問題と目的」は2章から成り、第1章では、中学生に関する学校心理臨床の先行研究を広く概観するとともに、一般の中学生、不登校の中学生、発達障害の中学生を対象とした投影法による研究、思春期心性と思春期危機に関する研究にとくに注目して、従来の研究の盲点を整理している。第2章では、C. G. Jungの言語連想実験と言語連想研究に関する先行研究を概観し、問題点をまとめた後、本論文におけるWATの位置付けを示している。

第2部「実証的究と事例研究」は本論文の主たるパートで、第3章の実証的研究、第4章の事例研究から成る。第3章の実証的研究では、さまざまな中学生の言語連想テストの特徴を捉えることを目的として、研究Ⅰから研究Ⅳまでの4つの研究が行なわれた。まず研究Ⅰでは、多数の一般中学生に個別法でWATを施行し、反応語の基準表を作成、コンプレックス指標の基準値を導き出している。以後、これが、個々の中学生におけるコンプレックス（心的複合体。劣等感のことではない）を見出すための基準となった。研究Ⅱでは、WATを用いて中学3年間の縦断的研究を行ない、この時期の心理的発達の標準的な特徴を検討している。研究Ⅲでは、不登校・不登校傾向の中学生のWATの特徴を検討しており、いくつかの興味深い指摘がなされている。たとえば、身体症状を訴える者は一般中学生とのちがいが比較的小さいため理解や対応が遅れがちになること、一方、身体症状のない者は自我が脆弱であること、などである。また（身体症状の訴えの有無にかかわらず）内省が困難であることも指摘されている。身体症状があるとそれが不登校の一因と考えられて身体面でのケアに重点がシフトしがちだが、身体症状を訴えない場合と同等の成長促進的な心理療法が必要とわかる。さらに研究Ⅳでは、発達障害を抱える中学生のWATの特徴として、想像力の乏しさにくわえて、コンプレックス自体の凝集度が低く乱離拡散している可能性が示唆された。

第2部の後半にあたる第4章は、WATを用いた学校臨床の事例研究で、研究Ⅴから研究Ⅶまでの3事例から成る。研究Ⅴでは、WATを通して自身の成長を確かめた女子中学生の事例から、自己の成長や問題克服を自分で確認できるというWATの臨床的特長を指摘している。研究Ⅵでは、母親の病気がきっかけで来談し退室渋りを続けた男子中学生の事例から、危険を伴う心的外傷体験の想起と表出および解消を安全になさしめうるWATの臨床的特長を指摘している。研究Ⅶでは、WATが悪影響を及ぼしたと思われる女子中学生の事例から、WATの禁忌について検討している。全体として、WATは、内面を容易には語ろうとしない思春期のクライアントに対して、楽しい遊びに近い感覚のなかで直接かつかなり安全に治療的変容をもたらすことができる。そこにWATならではの利点がある。

第3部「討論」においては、第5章で今回得られた知見を総括し、第6章で今後の課題と展望を検討している。

歴史ある心理テスト、WATに現代的な新しい意義を見出し、学校心理臨床における喫緊の諸問題に対して心理査定ツールとしてのみならず、心理的成長を促進するアプローチとしてもきわめて有効であることを量的および質的に明らかにした本論文は、学術面での貢献にとどまらず、現場での有効な支援対策の提案といった応用的な貢献もなすことが高く評価される。以上より、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断された。